ジェフリ・チョーサー作

トゥローイラスとクリセイデ（その二）

宮田武志訳

五四〇このように叫び、また、ほかにも様々な言葉を並べましたが、胸の悲しみを愛人に知らせんものと、悲しみを訴えながらその名を絶えず呼び、塩からい涙で、ずぶ濡れになりそうでした。けれども歎きの言葉が愛人に聞こえる筈はないのですから、すべては徒労に終りました。われながら他愛のない振舞に気がつくと、千倍もの悲しみがこみ上げて来るのでした。

ある時もただ一人、居室でこのように歎き悲しんでいる最中に、パンダラスという友人が思いがけなくはいって来ましたが、呻き声を耳にし、五五〇苦しみ悩んでいる様子を見て言いました。

「これはまた、誰の仕業なんですか。一体全体どんな悪いことがあったって言うんですか。ギリシャ軍の影響がこんなに速かなんだってわけですか、お窶れになったのは？　それとも何か良心の咎めることがあってご謹慎ってわけなんですか、そして、犯した罪咎を歎きながら神罰恐しさの悔悟ってわけですか。いや、われわれの町を囲んだギリシャ軍は大したものですな、われわれの浮き浮きした気分を押えつけてしまって、五六〇愉快な町の人たちをいとも神妙な気持にさせてしまうんだから。」

パンダラスはとっさの思い付きでこう言いましたが、それは、こう言えば相手がむっとして、暫くの間その怒りのために悲しみが薄らいで元気が出るだろうと思ったからです。こうは言ったものの、噂に聞くかぎりではトゥローイラスほど豪胆な人物、これほど立派な人物はまたとあるものではないということ、そのことをパンダラスはよく知っていたのです。

トゥローイラスは答えて言いました。

「どうしたんだい、どんな風の吹きまわしなんだい、僕の悲しんでるところにひょっこり来合わせるなんて、五七〇みんなから愛想をつかされてる僕のところにさ。とにかく、後生だ、頼むから出て行ってくれ給え、だって、たしかに、僕の死ぬところを見たんじゃ、君もいい気持はしないだろうからね、僕はどうしても死ななきゃならないんだ。だからさっさと出て行ってくれ給え、これ以上何も言うことはないよ。だが、僕が恐怖症に取っつかれてるんだろうなんて考えるなら大違いさ、だから軽蔑してもらいたかあないね。ギリシャ軍の今までの手並みも大したものだが、そんなことよりずっと気になることがあるんだ、そのことを考えつづけていると、悲しくて死にそうになるんだよ。今はそのことを君に話したくないんだが、怒らないでくれ給え、五八〇打ち明けないでおくのが一番いいんだから。」

パンダラスは悲しくもあり気の毒でもあり、ぐったり参ってしまいそうになりましたが、何度も繰り返しながら言うのでした。

「ああ、これはまたどうしたことなんですか。ねえ、トゥローイラスさん、愛情か誠実かがあなたと僕との間に従来も現在もあるとすればですね、そんな重大な心配事を友達に隠すなんてひどいことはよして下さいよ。お忘れなんですか、僕ですよ、パンダラスですよ。五九〇あなたをお慰めすることは出来ないにしても、あなたの苦しみは、すっかりあなたと分ちたいと思いますよ、だって、苦楽を共にすることこそ、まさに友達の権利なんですからね。僕はこれまでずっと、噂の真偽の程はさておいて、良きにつけ悪しきにつけ、何時もあなたに愛情を持ちつづけて来たんだし、今後も変らない積りでいるんです、だから僕には悲しみを隠さないで今すぐ話して下さいよ。」

悲しみに打ち沈んだトゥローイラスは溜息をつきながらパンダラスに言いました。

「君に話すのが最上ならいいんだがね。君の望みにもそうことになるんだから、じゃあ、話すことにしよう、胸が張り裂けそうだけれど。六〇〇僕の気持を和らげてもらえないことはよく分ってるんだが、君、まあ聞いてくれ給え、君を信頼しないように思われても困るからね。こういうわけなんだ、つまり、恋の神にあわれにも絶望的にやっつけられたんだよ、どう防いだって全然効果がないっていうあの恋の神にさ。今や僕の心はまっしぐらに死に向ってるんだ。恋の焔にこう攻め立てられたんでは殺される方がいくら楽しいか知れないよ、ギリシャとトゥローイを併せた国の国王になるよりも。六一〇真実の友パンダラス君、これだけ言えばもういいことにしてくれ給え、僕の悲しみは今知ってもらえたんだから。僕のはげしい苦しみは、後生だ、絶対に秘密ってことに頼むよ、今までほかの誰にも話さなかったんだから。だって、もし知れれば次々に不幸なことが起るだろうからね。だけど君は楽しく暮らすことだよ、そして僕には構わないでくれ給え、悩み抜い抜いた挙句、誰にも知られない

で死なせてもらいたいんだ。」

「他人行儀に、よくもまあ、長い間僕に隠していられたものですね、ばかばかしい。あなたが恋い焦がれていられる女性は、ひょっとすれば僕の助言一つですぐ解決のつくような人かも知れませんよ。」六二〇

「とんでもないことだ、自分自身の恋愛においてすらいい智恵が全然出なかった君にだね、僕を幸福にしてくれることが出来るわけがないじゃないか。」

「ご尤もですが、トゥローイラスさん、まあお聞き下さい、なるほど僕は愚か者ですよ、だけど、逸り気で事を仕損じる男だって、いい忠告をして友人を同じ失敗から未然に守り得ることが度々ありますよ。また、僕自身がこの眼で見たんですが、ずっと遠方まで見通せる人がつまずいた場所を、目の見えない人がどんどん歩いて行くんですよ。同様に、愚者が賢者を導き得ることだって度々ありますよ。砥石は勿論物を切る道具じゃあありませんが、物を切る道具を研ぎ澄ますのです。僕が踏み迷ったことをご存じの場所、そういう場所は避けて下さい、これをこそ前車の誡めと言うべきでしょう。このように賢者が愚行によって反省せしめられることも度々あるんです。あなたもそうなされば、あなたのご才能は有用に用いられることになるんです。すべて物の本質はその反対の物によって明らかにされるのです。なぜなら、苦い味を一度も味わったことがない人に甘い味の分ったためしがあるでしょうか。また、悲しんだり悩んだりしたことのない人には、心から喜ぶってことは出来ないと思いますね。同様に、白と黒と、恥辱と栄誉という工合に、各は他のものと並べられてこそ、他のものに対してその本質が一層明らかになるのです、これは世人も知っていることですし、賢哲もそう考えていますよ。このように二つの相反するものから一つの教訓が生れるのですから、僕のような度々恋の苦杯を嘗めた者こそ、それだけに一層よくあなたの悩みについてあなたにご忠告することが出来るというものです。僕があなたの重荷を一緒に担うことを望むからといって、決してお気持を悪くなさらないで下さい、それだけご苦痛が軽くなるんですから。(18)イーノーニって羊飼の女があなたの兄君のパリスさんに心の悩みを訴えて手紙を書いて送ったんですが、僕の状態はそこに書いてあるのと同じですよ、その女の書いた手紙をご覧になったでしょうね。」六三〇 六四〇 六五〇

「いや、読んだことはないよ、全然。」

「じゃあ、お聞き下さい、こういうことが書いてあるんです。

トゥローイラスとクリセイデ（その二）

[19]フィーバス様は医術をお創めになって、詳しくご研究になった薬草であらゆる人の病気を直す療法をご存じでしたが、この方のご学識もご自身には全然役に立たなかったのでございます、それは、アドゥミタス王の王女を想う恋のためにお心を全くお奪われになって、その医術でご自分の悲しみを癒やすことがお出来にならなかったからでございます。

不幸にも僕は今これとまさに同じ状態なんです。僕には最愛の女性がありますが、そのことでひどく心を痛めているんです。でも、自分自身に向ってはとても駄目ですが、あなたになら恐らくご忠告することが出来るだろうと思います。だからもう何もお小言はおっしゃらないで下さい。遊び好きな鷹のように悠然と空を飛ぶようなことは勿論僕にできる筈はありませんが、あなたの為に助言することなら少しはできそうです。このことだけは絶対にご安心願いたいのです、それは、よし拷問にかかって死ぬようなことがあっても、僕はあなたをお裏切りするような真似は断じてしないだろうってことです。誓って申しますが、あなたの愛人が兄君のお妃のヘレンさんで、僕がそのことに感付いたとしても、僕はあなたの恋をお引きとめしようとしは致しません。愛人がどんな女性であれ、お心のまま、その方をお愛しになって下さい。ですから、友人として僕を充分ご信頼下さって、あなたのお悲しみの理由、終局の原因を卒直にお打ち明け下さい。ご心配ご無用ですよ、今こう申上げるからって、僕は何もあなたをお責めしようなんて意志は毛頭ないんですから。だって、人の恋愛に横槍を入れて思い諦める気持を起させるなんて芸当は誰にだって出来るものじゃありませんからね。このことはよくご承知おき下さい、それは、人皆を疑うは悪し、人皆を信ずるは悪し、共に過てりってことですよ。だけど、その中庸の過たざることは僕もよく知っています。ある人を信じるということは自己の誠実の証左なんですからね。だから僕はあなたの間違ったお考えを取り除いてさし上げたいんです、そして、ある人を信じて悩みを打ち明けるって風なお気持にもって行きたいんです。さあ、およろしければ、どうか僕にお話し下さい。

[20]孤の者は禍なるかな、倒るとも助け起すべき人なし、[21]賢者もこう言っています。あなたは友達がおありなんです、ですからお苦しみをお打ち明け下さい、だって、これは賢者も教えていることなんですが、今もなお大理石にその涙をとどめているという女王の[22]ナイオビーのように転びまわって泣き叫ぶなんてことは、恋を癒る最捷径では決してないのですから、泣いたり悲しんだりなさることはおよし下さい、何かほかの話でもしてお悲しみを和らげることにしようじゃありませんか、憂鬱な時間がそれだけ短かくなるように思われるでしょうからね。悲しみの中に悲しみを求めることを楽しむなんてことをなさるのはおよし下さい、愚か者のすることですよ、そんなことは。この手合は一度不幸に陥る

と、歎き悲しんでますます悲しみを大きくするばかりで、悲しみを癒やすほかの方法を自分のために見つけ出そうとはしないんです。哀れなる者にとりて今一人の歎きの友を持つは慰めなりって世間でも言いますが、七二〇この言葉こそ われわれの 考えを よく言い表していると言うべきでしょう、あなたも僕も等しく恋に悩んでいるのですからね。全くのところ、僕の胸は悲しみで一杯なんです、これ以上僕に不幸が降りかかって来ることは絶対にありませんよ、そんな余地はないのですから。

僕があなたを瞞(だま)してあなたの愛人を横取りしようと思ってるんじゃないか、そんなことであなたが僕を警戒なさるようなことは夢にも考えられません。これまで長い年月の間、実際僕は誰を力一杯愛しつづけて来たでしょうか、それはあなたご自身がご存じです。僕の愛情に何等他意のないこともご存じだし、七二〇君こそ最も信頼すべき友だって仰有って下さるんですから、それに僕自身の悲しみもすっかり知っていただいたんだから、どうぞ幾分でも僕にお話し下さいませんか。」

パンダラスはこのように言葉を尽くすのですが、トゥローイラスはひと言も答えないで、死んだように身じろぎもせずに長い間じっと身を伏せています。しばらくして溜息と共に我に帰り、パンダラスの声に耳を傾けながら、つと、目を上に向けましたが、パンダラスは、気でも狂ったのではなかろうか、それとも今にも死ぬのではあるまいかと心配して、「目を覚まして下さい！」と途徹もない大声で語気はげしく叫びました、七三〇「どうなさったんです、昏睡の状態なんですか、それとも、驢馬(ろば)の耳に竪琴なんですか、驢馬って奴は人の掻き鳴らす絃の音は聞こえるものの、何しろ鈍感な獣のこととて、そのメロディーが楽しく心に泌みるってことは全然ないって言いますからね。」

こう言ってからパンダラスは言葉をきりましたが、トゥローイラスはまだ全然答えません、誰の為にこんなに苦しんでいるのかということを何びとにも断じて洩らすまいと決意していたからです。

七四〇賢者も言うとおり、人はしばしば自分自身が散々打たれる鞭を作るものだ、秘しておかるべき恋に関する秘密を打ち明ける場合において特に然りだ、なぜなら、注感深く抑えておかれないかぎり恋というものは、ひとりでに明々白々になるものなんだから。また時には、人が実際しきりに嗅ぎつけようとする事柄から逃げの一手をきめ込むのが利巧なこともあるんだ、トゥローイラスはこのようにひそかに考えつづけていましたが、「目を覚まして下さい！」七五〇とパンダラスが叫ぶのを耳にするや、いとも切なげに溜息をついて言いました。

「ねえ、君、じっと横になっているが僕は聾じゃあないよ、静かにしてこれ以上喚くのはよしてくれ給え、君の言ったことも忠告してくれた

こともすっかり聞いたんだから。今度のことが悲しいんだ、泣かせてくれ給え、いくら格言を挙げてくれたって僕には何の役にも立たないんだから。君にはほかに僕の心を癒やしてくれる方法もなさそうだし、僕も癒やされたくはないんだ、ただ死にたいんだ。女王のナイオビーのことなんか僕は全然知らないよ。昔の例などは、お願いだ、よしてくれ給え。」七六〇

パンダラスは答えました。

「いやいや、だからこそ僕はこう言いたいんですよ、つまり、不幸を歎き悲しむことが馬鹿者の趣味なんで、この手合はその対策を求めようとはしないんだってことですよ。たしかにあなたは理性を失ってらっしゃる。とにかく打ち明けて下さい、その女性は僕の知ってる人ですか、あなたがその為にこれほどまで煩悶してらっしゃるって人は？　あなたご自身は戦々兢々たるご様子で、とてもそのご勇気はなさそうですから、如何です、僕があなたのご煩悶をその人の耳に入れて、いくらかでもあなたに同情を示していただけないかって頼んで見ましょうか。」

「とんでもない、そんなこと、真平だよ。」七七〇

「何ですって？　駄目ですか、僕がこのことに命を賭けるくらいの意気込みだとしても。」

「駄目だよ、全く、君。」

「なぜ？」

「成功は覚束ないからさ、とても。」

「本当にそうお考えなんですか。」

「そうだ、問題にもならないよ、だって、あの女が僕みたいな哀れな男に靡く筈がないじゃあないか、いくら君に全力を尽くしてもらったってさ。」

パンダラスは答えました。

「ああ、一体どうしたことなんですか、理由もないのにそんなにお諦めになるなんて。まさかその人は既に亡くなられたんじゃあないでしょうね、本当に。その人の愛が得られないだろうってこと、どうしてそれがお分りなんですか。この種類の不幸は必ずしも処置なしとは限りませんよ。それなのに、処置なしと極めてかかることはないじゃあありませんか、将来の事はどちらに転ぶか分ったものじゃあありませんからね。七八〇

あなたが悲しみに堪えてらっしゃることは充分お認めしますよ、地獄に堕ちた[23]ティティオスのように辛抱強くね、書物の教えるところでは、兀鷹(はげ)って猛禽に絶えず胃の腑を裂かれるっていうあのティティオスのようにですよ。ところが僕はたまらないんですよ、自分の悲しみはどうにもならないんだなんて、馬鹿げた[七九〇]独り極めをしてらっしゃることがね。おっかなびっくりで、いらいらして、馬鹿くさいほど頑固で、人をお信じにならないでさ、一度だって悲痛なお心持を打ち明けようともなさらなければ、気持を鎮める為にいくらかでも理由を話そうと努めようとさえなさらないんだ、そしてただ、全くの放心状態で寝そべってらっしゃる。こんな哀れな男の愛せる女性がいるでしょうかって言うんですよ。[八〇〇]こんな状態でお命がなくなって、愛人には死の原因が分らないってことになればですね、その人はあなたの死をどう思うでしょう、きっとギリシャ軍が包囲したのに臆病風を吹かせて息の根が絶えたんだろう、こうとしか考えようがないじゃありませんか。こんなことをなさって一体どんな感謝が得られるでしょう、かわいそうにあの男も死んじゃったよ、悪魔に骨を持って行かれるがいいさ、こう言うでしょうよ、あなたの愛人も町中の人も口を揃えてさ。

こうして一人ぽっちで泣いたり喚いたり跪いたりなさるのも結構でしょうよ、だけど、相手の女性に知られないでいくら愛してみたって、心に泌みるようなお返しは得られませんよ。知られずば吻づけを得じ、求められずば忘れらるべし、ですよ。[八一〇]だって、自分の恋情を愛人に知ってもらうこと二十年、その恋情のために莫大な犠牲を払って来たのに、まだ一度もその愛人の口に接吻したことのない男だって沢山いるんですからね。どうでしょう、だからといって、その愛人がとても美しいのに、絶望に陥ったり、悲観して臆病になったり、自殺したりしていいものでしょうか、とんでもないことです、終始変らず、元気よく生々した気持で、愛する心の女王に仕え且つ愛すべきですよ、そして、そのような女性に仕えられるのは全く以って身に余る恩恵だと考えるべきですよ。」

[八二〇]トゥローイラスはこの言葉に耳を傾け、忽ち気がつきました、自分はなんて馬鹿だったんだろう、パンダラスの言うことが本当なんだ、自ら命を絶ってみたところで、自分は男らしくもなく罪を犯し、あの女(ひと)には死の原因が分ってもらえないというだけのことで、なんら得るところはあるまい、だって、あの女(ひと)は自分の悲しみを殆んど全く知らないんだから。このように考えながら痛々しく溜息をついて、

「ああ、どうすれば一番いいんだろう」

と言いますと、パンダラスがそれに答えて言いますには、

「およろしければ僕に八三〇お悲しみをすっかりお打ち明け下さい、それに越したことはありませんよ。誓って申上げますが、幾日たっても僕がお役に立たなければ、僕を八つ裂きにして吊して下さっても結構です。」

「君はそう言ってくれるが、そういう訳にはいかないよ、絶対に。今の場合僕を助けることは極めて困難だ、だって、僕は全くのところ、幸運の女神を敵に廻わしてるんだもの。およそこの世に生を享けている者は、幸運の女神の無慈悲な車輪の危害を避けることはできないんだ、八四〇だって、幸運の女神たるや、貴賤の別を問わず人を心のままに弄するんだもの。」

「お心が激していればこそ、あなたは幸運の女神を非難なさるんです、実際、今はじめて分りましたよ。ご存知じないんですか、幸運の女神の恵みはすべての人に共通にある程度及ぶものですよ。ねえ、実際、こうお考えになってご安心下さい、つまりですね、幸運の女神ってものはすべての人の側をにこにこ顔で通り過ぎることもあれば、泣き顔で通り過ぎることもあるんだってことですよ、だって、㉔その車輪が瞬間でも廻転をやめれば、幸運の女神は忽ちその本性を失ってしまうことになるんですからね。八五〇その車輪は絶対に一個所に止らないんですから、この移り気の女神はまさにあなたのお望み通りのことをしてくれることだってあるでしょうし、また、あなたに救いの手を絶対に差しのべないとも限りませんよ、ご存じないんですか、このことを。

こう申上げれば、恐らく歌い出したいような気分がなさるでしょう。これで、僕のお願いの趣旨もお分りじゃありませんか？　泣きっ面も地面との睨めっこもよして下さい、㉕医自の手当を望む者は誰だって、まず最初に傷口をすっかり医者に見せなきゃならないんですからね。八六〇万一あなたのお悲しみがすべて僕の妹の為だとしても、僕は喜んで明日にでも妹を全くあなたのものにしてご覧に入れますよ、そのために僕のからだが永久に地獄の㉖サーベラスの所に繋がれたって構やしない。さあ、顔を挙げて仰有って下さい、誰なんですか、その女性は？　早速一肌脱ぎたいんですよ、窮境打開のために。僕の知ってる人なんですか？　後生だから仰有って下さい、それが分ればそれだけ成功も早いと思いますね。」

トゥローイラスの血管には血潮が漲りました、パンダラスの言葉に打たれて恥ずかしさのあまり真赤になったのです。パンダラスは、「ふふん、いよいよゲーム開始と来たな」とばかりに頷いて、トゥローイラスのからだを揺さぶりながら叫びました、「八七〇この野郎！　名を言わないか、女の。」トゥローイラスは地獄にでも連れて行かれたように、哀れにもぶるぶる慄えながら言いました、「ああ、僕のすべての悲しみの源、僕

の美しい仇敵の名はクリセイデって言うんだ…」こう言いながら、おどおどして命も殆んど絶えそうです。その名を聞くや、パンダラスは喜び勇んで言いました。

「トゥローイラスさん、すてきですよ、断然。恋の神が恵みを垂れて下さったんだ、あなたに。お喜びなさいよ、だって、あの人[八八〇]なら評判もいいし、賢明だし、礼儀も随分正しいし、それにまた、身分もいいんですから。器量の点ならあなたご自身が百もご承知だと思います。あの人と同じ身分の女性で、あの人ほど心が寛くて、にこやかで、話し振りが親しそうで、物事をするのが親切で、為すべきことを難なく見つけ出す人はまだ見たことがありませんよ。錦上花を添えると申しましょうか、その名声たるやまさに極限に達して、あの人の心に比べれば国王の心でさえ下種[げす]の心くらいとしか思われないでしょうよ。ですから[八九〇]、大いに愉快になろうとお努めになることですよ、自己に対して平和な心を持することこそ、たしかに、崇高にして節度ある精神の第一条件なんですからね。あなたもこのことをお心懸けにならなくちゃ駄目ですよ、だって、熱烈な恋愛、しかも相手が立派な恋愛の悪かろう筈はないんですから。今度の恋愛を偶然だなんて仰有らないで、神の恵みだとお考え下さい。また、こういうこともお考えになってお喜びにならなくちゃいけません、つまり、あなたの愛人はよろずの徳の兼ね備わった人なんですから、その諸徳の中には憐憫の情も当然いくらかあるだろうってことなんです。ですから[九〇〇]。このことには特にご注意いただきたいのです、それは、あの人の名誉を傷つけるようなことは絶対にお望みにならないってことなんです、変な真似をすることが徳の一つだとは、どうも言いにくいようですからね。

いずれにしても、あなたがこんな幸運なことにおなりになって、僕も生れ甲斐があったって言うものですよ、だって、正直なところ、あなたにはこんな艶福は絶対に訪れないだろうって、敢えてそう断言したんですからね、僕は。なぜだかお分りですか、その訳が？　だって、あなたは何時も恋の神の後を追っかけまわして愚弄したり、やれ[九一〇]、聖鈍物だの、やれ、衆愚の頭目だのって嘲弄したりなさったじゃありませんか。あなたは無分別にも何度も何度もおからかいになったじゃありませんか、恋の神に仕える奴等は間抜けだからみんな恋の神にきれいに一杯喰わされるんだ、ベッドに寝そべって一人ぼっちで飯をむしゃむしゃ食いながら唸る奴がいるかと思えば、熱を出して真青になる奴もいるんだ、こんな風に仰有って、この手合の病気が治りませんようにって、お祈りになったじゃありませんか。中には寒がってやたらに着物を重ねる奴もいるんだって、こうも度々仰有った。ある奴[九二〇]はすやすや眠るくせに眠れないって風な口振りを度々するんだ、こういう風にして、この連中は立ち上

ろうとはするんだが、結局くたばってしまうんだ、こう言ってあなたは散々彼等を愚弄なさったじゃありませんか。恋をする奴等は、大抵一般にお喋りをしたがるものだし、また、失敗を避けるためには至るところで恋をしてみるのが確実な方法だなんて考えるんだ、こういうこともあなたは仰有いましたよ。あなたを嘲笑する積りならいくらでも出来るんですが、九三〇僕は命を賭けてこう断言したいんです、それは、あなたに限ってこんな馬鹿な連中の一人じゃないんだってことなんです。

さあ、改悛の情を表わして恋の神に仰有って下さい、神様、僕自身いま恋をして悔悟しているのですから、僕が不遜な言辞を弄したとすればどうぞお許し下さいってね。敬虔なお気持で衷心からこう仰有っていただきたいんですよ。」

「ああ、そうすることにするよ、僕の毒舌はどうか許してくれ給え、生涯二度と繰返さないから。」

「よく仰有って下さった、九四〇これで恋の神の怒りもすっかり解けたでしょうよ。これほど涙を流して神の心に適う言葉をお口になさったんだから、あなたをお許し下さるようにって、そう僕は神に祈ることにしますよ。よくお考え下さい、あなたのすべてのご煩悶の原因たるあの人も、今後はあなたを慰めてくれるに相違ありませんよ。だって、毒草の育つ土地には薬草も育つじゃありませんか、丁度、いやな刺草がぼうぼうと生い茂るすぐ側にしばしば薔薇の花が美しく気持よく優しく咲き出すようにね。九五〇谷間のすぐ側には丘が高く聳え立ってるんだし、暗い夜のすぐ後には楽しい朝がつづくんだし、また、悲しみが果てればそのすぐ後に喜びが待ってるものですよ。いいですか、手綱を緩めて成行きを時に委ねるのが一番ですよ、でなければ、われわれの努力もすべて徒労に終ってしまうでしょうからね。賢明に待ち得る者こそ巧みに急ぐ者なれ、ですよ。勤勉誠実、常に己を顕わさず、心楽しく且つ寛く、おのが務めに倦まで孜々たり、こういう調子でおやりになれば万事うまく行きますよ。ところが、賢人も言ってるじゃありませんか、九六〇よろずの方に心を散ずる者はいずれの方に於てもその心全からずってね。こんな人がはかばかしく行かないからって、何の不思議もありませんよ。また、ご存じのとおり、恋をする人の中には、色々工夫して草木を植えておきながら、あくる朝には忽ち引っこ抜いてしまう、こんなことをする人があるんですよ、それが生い茂らないからって当然じゃありませんか。

恋の神は、立派なあなたにふさわしいような境遇に、あなたをお置きになったのですから、しっかりして下さい、今や良港にお着きになったんですからね。九七〇どんなに苦しくてもご自身について何時も明るい希望をお持ち下さい、だって、あなたが徒らに楽しんだり、あせったりなさって、われわれの努力が挫折してしまうっていうようなこと、こういうことさえなければ、僕はわれわれの仕事にいい実を結ばせる自信があるん

ですよ。今度のことで姪に掛け合ってみることを僕は躊躇しないんですが、お分りですか、その訳が？　つまり、僕は学識ある賢人が言うのを聞いたことがあるんですが、男性にしろ女性にしろ、この世に生を享けた者で、天上の恋であれ、人の世の恋であれ、いやしくも恋の焔に心を焦がすことを嫌がるような者は未だ嘗て存在しなかったのですから、姪[九八〇]にもそこばくの情心(なさけ)はあるだろうって訳なんですよ。

さし当って姪のことなんですが、あれの美しさだの、若さだのについて考えてみますと、天女のようだなんて、まだまだ言えた柄じゃありませんよ、本人はそれを望み、また、それに追っつかないでもありませんがね。正直に言って今のところ、誰か立派な騎士でも後生大事に愛するくらいが、あれに相当したところでしようよ。あれがもし騎士を愛さないのなら自分が悪いんだと思いますね。このような訳で、僕は何時でも喜んであなたの為に今度のことで粉骨砕身しますよ、そうすればあなたたちにも喜んでいただける時が来ると思いますね、だって、お二人とも賢明で、秘密を守ることにかけては誰も及ばない程慎重なんだから。ですからわれわれ三人の喜び合える時がきっと来ますよ。[九九〇]

実は丁度いま、あなたのことでとても愉快なことを僕は想像してるんですよ、それはこうなんです、今や恋の神が慈悲深くもあなたの間違ったお考えを変えて下さったんだから、あなたが今後はきっと恋愛教の信仰の大黒柱におなりになるだろう、そして、恋の神に叛く奴等を懲らしめる急先鋒におなりになるだろうってことなんですよ。改心の例として、賢哲と呼ばれる人たちをご覧下さい、これらの人たちこそ、誰よりも一番恋の神の掟を侵すのですが、彼等を御身(おん)近くに引き寄せ給わんとする恋の神の恩寵によって、邪悪な行いが改まり、恋の神を最も畏敬する、最も道心堅固な信徒になって、過ちを犯さざること何びとも彼等に及ばずということになるんだと思いますね。[一〇〇〇]

クリセイデに対する恋愛の助太刀をすることを、パンダラスが引受けてくれるということを聞くや、いわば苦悶の拷問を受けることはやんだものの、トゥローイラスの恋情はますます燃えさかり心は躍るのですが、落着いた表情で彼は言いました。[一〇一〇]

「ねえ、パンダラス君、僕は聖なるヴィーナスに祈ることにするよ、死ぬまでにいくらかでも君に喜んでもらえますようにってね。それはともかくとして、ねえ、君、それより前に差当り、どうすれば悩みを和げることができるだろう？　それにまた、君、このことも聞かせてもらいたいんだ、君は僕のことだの、僕の苦しみのことだのを、どういう風にあの人に話してくれる積りなんだい、実際これが一番心配なんだが、あの人を怒らせないようにさ。あの人が事の次第を聴こうとしないとか、信じようとしないってことがあっても困るしね。僕は心配なんだよ、こういった点が。それにまた、叔父たる君の手前もあって、こういうことには耳を傾けようとはしないかも知れないよ。」[一〇二〇]

パンダラスは答えました。

「大したご心配ですね、月の世界の男が落っこちて来やしないかとでもお思いなんですか。全く嫌になりますよ、あなたのお馬鹿さ加減と来たら！　ご自分のなすべきことだけなさってらっしゃればいいじゃありませんか。後生一生のお願いです、万事僕にお任せ下さいよ、それが一番お為になるんですから。」

「それじゃ、君、好きなようにしてくれ給え、[一〇三〇]だけどパンダラス君、ひと言だけ言わせてもらいたいんだ、つまり、いやしくも愛人を傷つけるようなことだの、迷惑をかけるようなことだのを、敢えてするほど僕が馬鹿だとは考えてもらいたくないってことなんだよ。だって僕は、善良だってこと以外、どんな風にもあの女に取られたくはないんだ、それくらいなら死んだ方がましなんだ、断然。」

パンダラスは笑いながら答えました。

「僕がその保証人になるんですか、ちえっ！　恋人は皆これなんだ。いっそのこと、あの人がここにいて、あなたの今仰有ることを聞いてくれればいいんだが。[一〇四〇]とにかくご機嫌よろしく、僕はお暇しますから。さようなら、お元気で。神がわれわれを助け給わんことを！　僕には骨の折れるこの仕事を、そして、あなたには僕の成功のあまい果実全部を授け給え！」

その時トゥローラスは腕いて、パンダラスを両腕をしっかり抱きしめながら言いました、

「小癪なギリシャの野郎たち！　とにかく最後には必らず味方が神のご加護を賜るのだ。僕の命のつづく限り、神もご照覧あれ、きっと奴等の幾人かを取っちめてやるんだ。[一〇五〇]しまった、少々吹き過ぎたかな。ねえ、パンダラス君、君が賢明で、知識が広くて、能力もあり、往くとして可ならざるなき人物だってこと、そのこと以外に僕は何も言えないんだ。僕の生死は全く君の手に委ねることにしよう、助けてくれ給え。」

「承知しました、誓ってご援助致しましょう。」

「ねえ、君、神が君に酬いを授け給わんことを僕は祈りたいのだ、特にあの人に執り成してくれる君の労に対してね、生涯僕を支配すべきあの人にさ。」

真実の友に対して一肌脱ぎたいと思っているパンダラスは言いました。

「[一〇六〇]じゃあ、ご機嫌よう。きっと感謝していただけるでしょうよ、今ここでお約束しておきますが、やがて充分ご納得が行くことでしょう。」

今度の事、姪に色よい返事を懇請する最上の方法、その時と場所の選び方などを考えながら、パンダラスは道を急ぎました。家を建てようとする人は誰でも、そそくさと大急ぎで仕事に取りかかろうとは決してしないものだ、暫くじっくり落着き、まず最初に一意専心、熟慮を重ねて成算を得ようとするものだ、パンダラス[一〇七〇]はこのように考えながら、着手に先立ち極めて慎重に計劃を練るのでした。

さて、トゥローイラスはいつまでも身を伏せていないで、すぐ起き上って栗毛の馬に打ち跨り、戦場で獅子奮迅の働きをしました。その日に彼に出会ったギリシャ兵こそ災難です。その後ずっと、町における彼の態度は極めて良くて絶大の人気を集め、彼と顔を合わせるほどの人はみな彼を好ましく思ったのでした。それもその筈で、今や彼はその時代には類を絶するほどこの上もなく親切な、穏かな[一〇八〇]、寛大な、立派な人物になり、最良の騎士の一人になったのです。嘲弄、無慈悲、横柄な態度、一風変った様子などはすっかりなくなって、これらの欠点はことごとく美徳に変ったのでした。

ここでトゥローイラスのことは暫くおきましょう。今や彼は、深傷(ふかで)を負ったのち傷の痛みはやや薄らいだものの、まだそれ以上には快方に向わない病人といったところで、苦痛[一〇九〇]のない病人よろしく、病気をなおしてくれる人の指図を待っているのです。このような状態で彼は恋愛沙汰をつづけて行ったのでした。

巻の一　おわる。

注　解

(18) トゥローイの町の近くのアイダ（Ida）山のニンフで、パリスに愛せられたが、後に棄てられて自殺した。

(19) この個所は主として、Ovid : Heroides, V, 15 f. から暗示を受けたようである。フィーバスというのは勿論アポロのことで、アポロの愛人として通常引合いに出されるのはダフニーであり、巻の三の第七二六行にもこの名前が見えるのであるが、チョーサーはここでは、アポロがテッサリア王アドゥミータスに愛着を感じたのは、その娘に対する愛情の故であるという説によっているのであろう。

(20) 参照―伝道の書四・一〇「二人は一人にまさる……その倒るる時には一人の人　その伴侶を扶けおこすべし」

(21) ソロモンのこと。

(22) テーベ王アンファイオン（Amphion）の妻。子供の多いことを自慢していたが、その子供を全部殺されて悲歎にくれ、ジュース（Zeus）によって石に変えられてしまった。Ovid : Metamorphoses, vi 312 参照。

(23) エーゲ海のユービーア（Euboea）島の巨人。女神アーテミス（Artemis）に暴行を加えんとして殺され、地獄に堕ちて絶えず兀鷹に肝臓をついばまれた。

(24) 参照—Boethius, ii, Pr. 1「若し幸運が一ところに止まり始めたとしたら、それはもはや幸運ではないことになる。」

(25) 参照—Boethius, I, Pr. 4「若しお前が医者の手当を期待するなら、まずお前の傷をさらけ出さなくてはならぬ。」

(26) 地獄の入口の番犬、頭が三つあり、尻尾が蛇になっている。